

テルルの林理恵子さんが「登山時報」2018年6月号で、「新田次朗『孤高の人』にはいろんなシーンがある。あなたの『孤高の人』は？」と問いかけておられる。

実は中川も新田次朗『孤高の人』（新潮社 1969）や加藤文太郎「単独行」（二見書房 1966）を読みつつ山にのめりこんだ。甘納豆、アルコールランプ、油紙、脳を冷やさない厚手の防寒帽など、多くのシーンをすぐ真似した（ただし近代装備で）。だが彼が言う「死ぬ前には寒くて震えて起きる。眠れない。」だけは信じられなかった。1968年大学1年生で登山を始めた中川は先輩・親・親戚から「寒さで頭がおかしくなる」話ばかりを聞かされていたからだ。今回は加藤が「死ぬ前には寒くて震えて目覚める」話を考えよう。

中川の中川加藤文太郎ごっこは寝袋なしでまず夏山に進んだ。1970年ころ剣岳→前穂高岳を地下たびで韋駄天縦走した。さすが夏山、寒くてちゃんと目がさめた。浅はかな中川はこれで加藤文太郎を8割がた信じた。凍死の前に眠り込んだり頭が狂ったりはしないと。

ところが1971年、新田次朗は「八甲田山死の彷徨」を書いた。低温のため脳をやられた兵士が風呂だと言って服を脱ぎ雪の吹だまりに飛び込むシーンをはじめ、稜線に居並ぶ救助兵士たちを黒いカラスの群れと幻覚を見るシーンなどを、事実をもとに、これでもかこれでもかと、執拗なまでに描いたのである。中川はショックで、分からなくなった。

中川がさらに行き当たったのは1963年1月に愛知大学山岳部13名が薬師岳登山中に全員死亡した事故を調べた1975年ころだ。死亡者の中には衣服を脱いでいた人がいた（近年では例えば金田正樹「低体温症」（羽根田治他「トムラウシ遭難はなぜ起きたか」山と渓谷社 2102年 241ページ）と知ってがく然とした。中川の低体温症の認識は揺れ動いた。意識もうろうや錯乱は、疲労のせいなのか？低温のせいなのか・・・？

2009年7月16日のトムラウシ死亡事故で中川には決着がついた。金田正樹氏が第4章でとことん書いた。研究方法はある意味単純だ。疲労のない健康状態で体温を人為的に下げて麻酔状態（や意識混濁も）が起きることを調べ、医学的に利用してきたのだ。低体温症は、夏でも冬でも低体温だけで起き、さらに疲労が相乗的となると中川は悟った。

さて、加藤文太郎の低体温症防止対策は有効かどうか？結論は「疲れこまないうちに対処をする」に尽きる。そうだ！中川はこれでいこう。すいぶん楽な気分になった。

疲れこむと低体温症の前兆である「全身の大震え」が起きないまま脳をやられる事例も多いし、急激な低温でも震えが来る前に脳がやられるという（前掲の金田の著書）。

トムラウシの遭難は、引率登山の問題点や低体温症の恐ろしさなどを私たち登山者に「明日は我が身」と突きつけた。中川には、低体温症のシーンが一番強く心に残った。トムラウシの遭難や加藤文太郎を読んで、あなたは、どんなシーンが心に浮かびますか？

つづく